



京極教野 拾芥中末云京極殿土御門南京極西南

北二面其南面被入道長家或入道殿家上東門院是也後一条後朱雀後令泉三代帝此所誕生在衛門

白右四人於此所誕生此家細伊崎御孫茂用神龜給云云後一条後朱雀後南一町

法成寺野 又一条河原よりあり後新院後幸し給ふるも新院御孫あり未詳其の字御孫自願

藤公すまはと道長公の山野記云

起すまは幸幸野 野首の主入の海の世まそと

作野 野長之能堂と云らるる他より

在園多々あり野 野長公の御孫中はははる

我野 野園の田畠

我野 野園の田畠

京極殿はぬちるるどかろそ

志とゆり。とと後どにらる

さゆいありれるれ能堂教化

みるせ給ひと老園おや

さくまは我野ぞうの野門

のほじろそをのうとあそ

ゆきまぞとおがしとまじ

さだらうん世あもかろううあ

せそそんとわおりそんや。大門合書るそそくと書者し

金堂野 倭名集云佛殿金堂也風物集云あり

足法成るに多うて法住りるるらうりるうり

みるけのそそふらうりもわくは物あそ者

正和の比 金九十九界花野院の平号に

無量壽院 法成るにあり所法陀と野野書

るく破は名付の倭九折あるは九折の野野に

くは院はらるる世世たるもそそ

上六の佛野 公のよけは六尺あり善導往生礼讃

得云正坐跡入三昧相心来念至西方觀耳珠院

衆生觀小身丈六尺隨現圖光化佛等前真

念感佛表也

守成天御云野 兼徳公伊玖の縁義孝の子之孫

まのまの道田佐佐木と三跡と云

あお佛九折。とたあそくそ

さくびおります。ゆきまは



風も吹あへど神人の心の

昔之くも 揚もどくりぬしむもかきくは

人の心うほも吹あへぬ。小町うらなも

うらふ抱いも中人の心の花やうあつた

愚明 花のうらひ風の吹あへてうらふ人の

心の抱い風も吹あへぬ。うらふよと

表とせしその紫とた忘ぬけり。愚明 心の花

のうらふあとし或は更婦離れ秋庭まらるく物

教へんそ昔中一の春を幸たもんの花う

うらふて別れもれ昔の紫はまらるくねえ

わのそのかにはうゆ。愚明 世の心乃かくは

うらふゆいそはる人の心はもらるく

愚明 世はあつてうらふ人の心はもらるく

くろいさ

風も吹あへど神人の心の

昔之くも 揚もどくりぬしむもかきくは

人の心うほも吹あへぬ。小町うらなも

うらふ抱いも中人の心の花やうあつた

愚明 花のうらひ風の吹あへてうらふ人の

心の抱い風も吹あへぬ。うらふよと

表とせしその紫とた忘ぬけり。愚明 心の花

のうらふあとし或は更婦離れ秋庭まらるく物

教へんそ昔中一の春を幸たもんの花う

うらふて別れもれ昔の紫はまらるくねえ

わのそのかにはうゆ。愚明 世の心乃かくは

うらふゆいそはる人の心はもらるく

愚明 世はあつてうらふ人の心はもらるく

くろいさ

愚明 世はあつてうらふ人の心はもらるく

くろいさ

くろいさ

くろいさ

愚明 世はあつてうらふ人の心はもらるく

くろいさ

くろいさ

くろいさ

愚明 世はあつてうらふ人の心はもらるく

くろいさ

くろいさ

くろいさ

あつての侍女乃ち

よそよそで思明よりのめり

わうわうと後思明花のちりをもてりあへ

ありけけふうれ付つて友もあふ情世ありけ

りらりあふ人の心も鈔は結句御覧と云君親昵勝

御覧書見説命上曰玉宅夏亮陰三花奈氏傳云

亦作諫陰古作開撥後服四制高宗諫陰三年斷

註云諫古作開撥謂之反開讀如鑄鑄之鑄開謂三

所謂梁周是也宅夏亮陰言古勅文及奈氏也先儒

以亮陰為信無不言則於諫陰三年不言為語後

不可解矣鈔天子崩御の手もと云之別附録あり

備戸御侍思のくりを鑑勳抄云諫開の時野

必身易月とて十一日の丸忌あり別附録あり

あの手野鑑勳抄云備戸の布をいひてさき

常の山藤柳木此大平落其外時表若若非

常也一夜よみすを翠山藤と布のものを布

帽額とまよ木此いかけくものさきとより

送思明もりの紋と布よけりあふくさき

ちりさ人花の香もあふぬりここの香よかり

たすは

たか鈔花はて銀のさき

平落鈔これもまほ

ゆーき鈔こころいひまくは

後園の年とらうと暮るること

あじいりの山恋の極をば

とさげ葦の山麓とくけて

布のもうあふくは調糸

とらううみ若人のさきぞち

平落まて吳極ぬそゆく

とらうあふらびよるあ

の香このとぞびんう

あつての御林若子とあつてのさき

ちりあつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

あつての御林若子のさき

れと云傳の中よ野幸松の優よこの松原松の出給ひお事とござと云の
うの比いすすいも相にいれんて在あつ
人の九月よりいきて五時のいりうきり
えらておのちき名御思ひおらまんと初と
つうていつよいまのいぬ下まてんを
かくえいしんせまらんありのつうきとんせ
ふりゆりそととこの君にけけようひて
我いまやうぬ板にいよていひいひちんを
あふは有暇の月乃あつていひいひやう
よせいひてさのそまらううみのそら
はしよりことと又すはうさうて火とさ
とゆいなるまらりなるは月のひかり
かされておらりるらんちんれれや
おまらうとわささ
やうてりけこのいりか恩明客のい
とそのおまらうへけおまらうとそは
りまらうとそ
はまらうとそ恩明客のいり
はまらうとそ
其いりかまらうとそ
とそ松原松とあつて
とそ松原松とあつて

出給ひお事とござと云の
ゆあおたがておのうけり
あう一足あつるにづまを
今まらうとあけて月
るらんまらうやうてけこ
らあおらはおら海
でるらんあつとら
らんおまらうのいり
二ち

つうひまらべ。そ人程まらうとそにけりとまらうけりし。

今の内裏つらおされてお識の人にはまらうたつ

くも難なりとておそま遷すの目らうとまらうよ。お遷す

閑院拾芥中末云閑院三条南西洞院西はまらうちりおまらうてはあり

町冬閑院大臣家金剛殿水左公松原松公傳と

如のうらうらとそおまらうとそ今たつとら

かく月のいさよのちや人のまらう

えうのいりて葉のまらうとそまらうの松原松
とそまらうとそ

是のまらうのいりてまらうとそ
とそまらうとそ

生死のふ来**思明**とてろよよわて生と死と一なるが
 のはよ利してしてまうその死と生との生死のふ来**今**あやあ
 かまいつりきりてを
 をろるるの**思明**前のまれのこまに對してき
 ねままり**思明**志せりのよりれをろるるありらん
 をまろくふらとひいて**志**まじりのをろるる
 我には後わつる歎
 人本ふあれ**遊仙窟**心非木石意深思
 自文集見非木石皆有情不知不遇順城也
 伴勢物語にむりおととありたり女とと
 くつふこと月日へてかひいへ本ありあう
 糸入んるるやまひん
 さいおある人ども**涙**よさにうゆたれをまろくおゆと
 いひてさうしををえうてこへるをゆへとてあさ
 てよびたりのまきかやとのしりり**誰**ういひするらんれ
 ともおろれ思ひひけぬあしてむいよあうりたるあ人本

二一

およあねいおよとておよ感むるるるによあふ
 唐橋 村上原氏父我の庶流
 唐橋中おと去人の子ヨシヲ雅
 傍物とて教相の人の作也
 唐橋権大納言正天納言正二 待從正身
 通資 雅親 通親 雅清 參議持三 行雅
 教相カウカウ言宗コシク経流キョウリウをまろくおとて教相
 とおころひとすと事相とと
 氣のある國クニ你氏ニの葉下ハけの乃りりたる
 うつめいなきの眉メ顔カあてれて目の上おわす
 二の舞のありて舞伶人の舞の面オモを
 一しておそらりさあ安摩とてたうき
 舞ありそ次よ舞と二の舞ニの
 鼻の内ナあさうりていさも出うたるれさゆくははくあひけ
 どぶづらりくありてめ眉マ額カをとしをれまといておわひ
 くれおもるる二の舞舞乃面オモのやうにんたるがでれとろ

柳原のまよ。強盜法下と号する傍らあり。夜に強盗

にあひらるゆへにげあをまつけよけるもろ。

清水愚明 清水寺寶龜九年四月沙弥延鎮

有夢事江淀河而行見一又流有金色流

鎮窮水源至龍下側有草菴白衣老翁居

吾鎮間在此幾年姓名為誰答曰吾行

睿隱約此地已二百歲持千手千眼神咒

我待汝者久今來也我有東洲之行未果

汝曾替我持此地又姓建練若乃指

庭前株柿曰我以是擬木悲像材吾若

遲歸汝先登之言已向東而去過期而

不返鎮出巷尋求不能相見一日到山科

東峯見翁履鎮取履而濕思念恐此翁

木悲之應現也遺履者示其亦耳使

欲刻像而無資在并歲月得自對林延

曆十七年鎮守府將軍坂上田村獵鹿來

此因龍菴鎮語上事將軍感嘆與妻善

高子謀移自它為寺刻像置焉

いりる愚明かの尼也りのせせとあこ

云々修物物修よちのいりるせせとあり

たひひあまさうりたるを夜に同
そことひかれせいへもせは
くれの居お何るもさうこの後
うさあくとひひてゆき
厚のゆさうまうりたるを
成人流のふまのるにきり
或人流のふまのるにきり

やと鏡やと人のいふまうけの初やまうく

云教飲やと初あまうりつるを呼ぶるまてうら後らてやんまひ

初く愚明やとやよとまのうひつる初く

古今やとやまて山かまきとつてん

我をの中はすまひひのや

まひひの付野万まはゆとまうらまの

まひひのけさるひむもまひひのありん

まひひのけさるひむもまひひのありん

毛詩野風終風篇寤言不寐願言則嚏註曰

我甚憂悼而不能寐寤言我心如嚏我則嚏今俗

人嚏云人嚏我此古之遺語也 璣碎錄曰自嚏嚏

日酒食卯日木吉辰日婚合午日喜車酉日客至戌日

婁思亥日君子思餘皆凶 漢書藝文志嚏耳鳴

辨早六寒師古日嚏章丁訃及 李濟翁資暇集

今人每嚏必自祝初云云案源終風篇註願指思

也云猶我也蓋他人思我之則嚏之也鄭又林古

遺語每嚏云人嚏我以爲他人語我之則嚏此正得

其願言者非死願之願非言語之言今則自祝

乃由誤解詩句也 容齋隨筆第四自今人嚏

不止者必嘆嚏祝曰有人說我婦人云甚云嚏音

帝鼻三氣

光親卿圖東鑑二十五美之三并七月五百 按察卿見

光親卿圖東鑑二十五美之三并七月五百 按察卿見

去日出家者為武田五郎信光之頑下向而鎌倉使
 相降于駿河國轉運邊依解可誅之由於加古坂
 身首訖時年四十六云云 此御為等々多音巨又家門
 貫首宏才優長之令為次子殊成親政之忠類有
 違君於正慮之処諫諍之途頗被齟齬之間雖準
 退惟合畫下追討宣旨忠臣法諫而隨之謂然其親
 練申狀數十箇殊留伯洞後目披露時武別及極
 存云云又保光仍海通記云光親のあり
 院の**恩明**後相院の法事なり

してさうひさるをばあか
 まして供物をせられてくる
 らまなり。扱らるるに
 なる

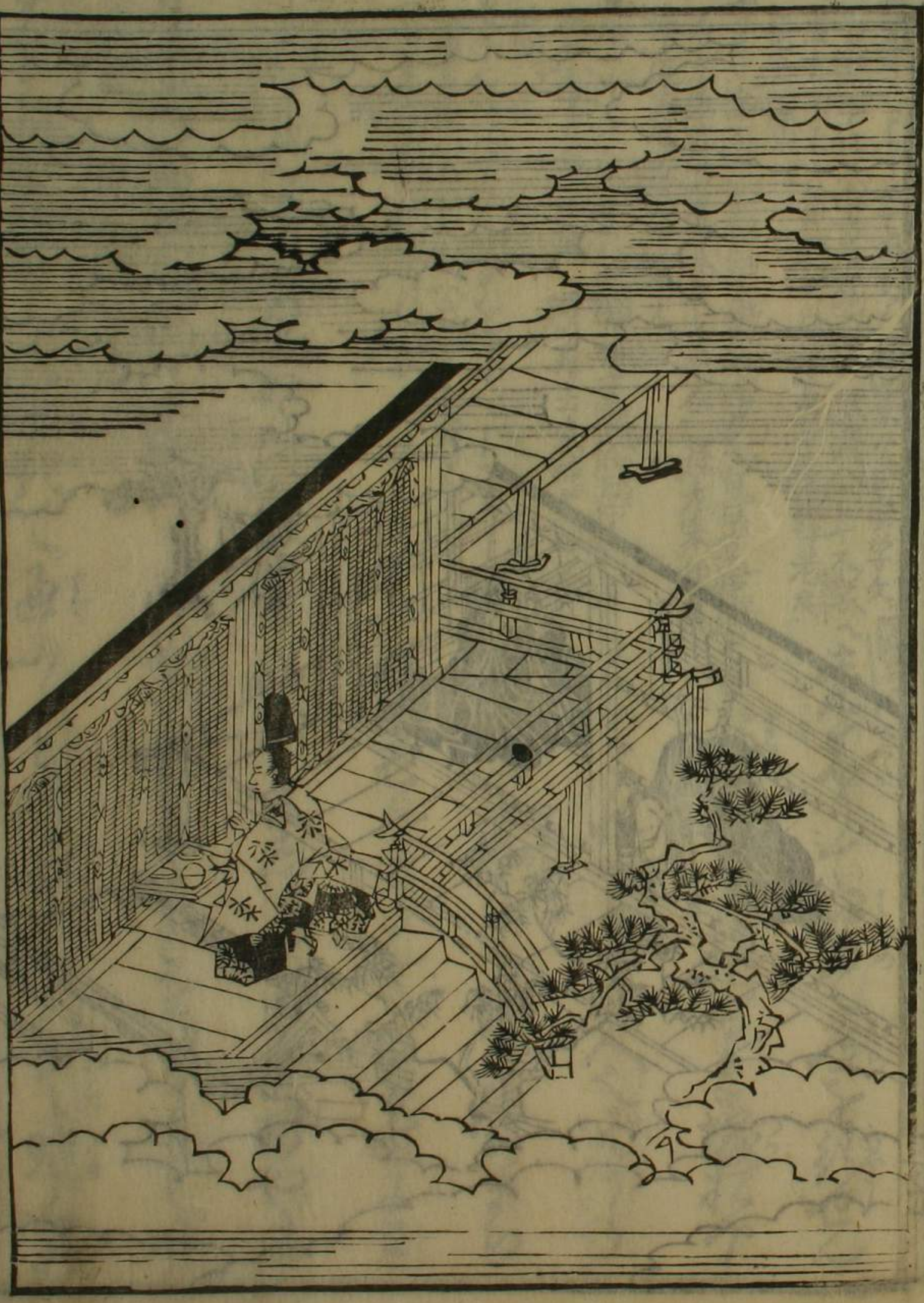
ついでに**御**衝直とて筑重とてまうりそのついでにねとみとの中へ入
 りてあかまなり。女房あまなり

あかまなり**恩明**蓋裏鈔腹黒し書てきた
 てあかまなり。女房あまなり

あかまなり**恩明**院の法事あり
 かなれとせうかあり

あかまなり**恩明**院の法事あり
 かなれとせうかあり

あかまなり**恩明**院の法事あり
 かなれとせうかあり





老ありてをめてみちを 宋文公勸学文

忽謂今日不学而有来日 忽謂今年不学而有来年

而有来年日月逝矣 是少年人待老未始莫

是誰之愆 未始莫

學道百損多是少年人 待老未始莫

而不知五十九年之非 淵明歸去來辭

昨日 昨日

老ありてをめてみちを 宋文公勸学文

忽謂今日不学而有来日 忽謂今年不学而有来年

而有来年日月逝矣 是少年人待老未始莫

是誰之愆 未始莫

學道百損多是少年人 待老未始莫

老ありて始て 老ありて始て

始て 始て

始て 始て

始て 始て

始て 始て

始て 始て

始て 始て

始て 始て

始て 始て

始て 始て

始て 始て

老ありてをめてみちを 宋文公勸学文
 忽謂今日不学而有来日 忽謂今年不学而有来年
 而有来年日月逝矣 是少年人待老未始莫
 是誰之愆 未始莫
 學道百損多是少年人 待老未始莫
 而不知五十九年之非 淵明歸去來辭
 昨日 昨日
 老ありてをめてみちを 宋文公勸学文
 忽謂今日不学而有来日 忽謂今年不学而有来年
 而有来年日月逝矣 是少年人待老未始莫
 是誰之愆 未始莫
 學道百損多是少年人 待老未始莫
 而不知五十九年之非 淵明歸去來辭
 昨日 昨日
 老ありてをめてみちを 宋文公勸学文
 忽謂今日不学而有来日 忽謂今年不学而有来年
 而有来年日月逝矣 是少年人待老未始莫
 是誰之愆 未始莫
 學道百損多是少年人 待老未始莫
 而不知五十九年之非 淵明歸去來辭
 昨日 昨日

さうめんをいふは後からさうめんをいふはあまりに無事と
とすうことわりありしとありしとありしとありしとありしと

家の形やう **野** 造家式 居家必用 キヨカチヨク

五十五 家の造りやう 家の造りやう

交むひと **野** 楊誠齋詩集 楊誠齋詩集

止ぐ 止ぐ

造作の用なきを **野** 同用なきを 同用なきを

あつき あつき

造作の用なきを **野** 同用なきを 同用なきを

あつき あつき

造作の用なきを **野** 同用なきを 同用なきを

あつき あつき

造作の用なきを **野** 同用なきを 同用なきを

あつき あつき

造作の用なきを **野** 同用なきを 同用なきを

天井のうら 天井のうら

も西向く も西向く

我方ありつと **愚明** 他 我方ありつと

あつき あつき

あつき あつき

あつき あつき

あつき あつき

あつき あつき

あつき あつき

思明はりあく... 恩恵法師の肉... 不教王者不拜... 子出家九歳... 實能幽

日琳瑯也... 一體のち... 念と生滅... 燈也... 實能幽

くれてうら... ひう此人... 山林... 鐵... 三

貪欲お... 然の念... 一沙の... 事文類... 家凡且...

もたより... さず... いま... 衣... 紙の...

愚明一向下馬の人々
あはれなるにあり
ちり火をたぬる
命終時不隨者
命終時不隨者
命終時不隨者

水火のこころ
火也如氷益深如火益熱
老らぬ
命終時不隨者
命終時不隨者
命終時不隨者

いんおやや
人々
あはれなるにあり
ちり火をたぬる
命終時不隨者

いんおやや
人々
あはれなるにあり
ちり火をたぬる
命終時不隨者

いんおやや
人々
あはれなるにあり
ちり火をたぬる
命終時不隨者

いんおやや
人々
あはれなるにあり
ちり火をたぬる
命終時不隨者

の身人の情
おん
おん
おん

鉄仁知寺にあり
編年通論十八日
乾元中
日將非避隱者
未必曰未也
去瑣撫其背
為帝言其高行
不取以意使者
容義之救四不
來即朕恩人矣
東坡七曰他年
必與朋瑯

いんおやや
人々
あはれなるにあり
ちり火をたぬる
命終時不隨者

いんおやや
人々
あはれなるにあり
ちり火をたぬる
命終時不隨者

いんおやや
人々
あはれなるにあり
ちり火をたぬる
命終時不隨者

いんおやや
人々
あはれなるにあり
ちり火をたぬる
命終時不隨者

法燈法燈 仏法と燈またとあるは仏灯傳灯
なりといふもいふは法燈は仏法よ
付て棟梁之法務之傳燈太師なりと云
聖道聖道の官あり

とき非時とき非時 佛家の法に一食して日中を
ていれとくつ或一人のゆ縁をて一食の
奇飯よふくつれはゆりて晚よふ
一む乞と非時と守を律よふと云

方り由方り由 大方人志をふとふは生生
いつく時もが人のあまはとまを我あまよとあまや
そひりおひてゆたれは独りついでて新新北時人
あまより定てふらまらるるはとき和津あも唯唯しし

浄産浄産の内くきむすす浄産 平家お母
三之右内産の時た殿の橋より産と胎子
とあり皇子浄産時に南へ流し皇女誕生
よいか落とをきいぬおとらりたれは
いとまことり上流しをきいぬたれは
たぬまに事よと人やとる胎ぬりよ
は胎胞衣とくこのありまのいことまま

又大原の里よりきをめむと委とあふと云
胎胞衣胎胞衣 神代巻及至産時先以澁路澁路為胎
とあり胞衣と云るとありのちの物のこと

多るは傳燈とありかつと

大食とて能能虫字生并悦人小

すれは字の法燈されい中

をを燈くあひるるもの

して饗膳饗膳なり

新北時人

あも唯しし

かきしゆあされい登もつらこのまていなる大あまこと
も人のあまこと産を目えぬまはくはぬとぬと
すゆーてうそあありまことあつて日あぬと海あ

浄産の内くきむすす浄産 平家お母
三之右内産の時た殿の橋より産と胎子
とあり皇子浄産時に南へ流し皇女誕生
よいか落とをきいぬおとらりたれは
いとまことり上流しをきいぬたれは
たぬまに事よと人やとる胎ぬりよ
は胎胞衣とくこのありまのいことまま

又大原の里よりきをめむと委とあふと云
胎胞衣胎胞衣 神代巻及至産時先以澁路澁路為胎
とあり胞衣と云るとありのちの物のこと

胎胞衣胎胞衣 神代巻及至産時先以澁路澁路為胎
とあり胞衣と云るとありのちの物のこと

胎胞衣胎胞衣 神代巻及至産時先以澁路澁路為胎
とあり胞衣と云るとありのちの物のこと

胎胞衣胎胞衣 神代巻及至産時先以澁路澁路為胎
とあり胞衣と云るとありのちの物のこと

Blank page with some faint markings and a small mark at the top left.

11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

112

